

AFTERNOON TEA

大阪大学大学院生命機能研究科生理学教室

竹内 裕子

イタリア人に学ぶ

Duke University Medical Centerの佐藤寛栄先生からバトンを託されました。Afternoon Teaの趣旨にのっとりまして、私の雑文が皆様の研究の合間のお茶菓子になりましたら幸いです。今年、冬季オリンピックがイタリアのトリノで行われ、女子フィギュアスケートの荒川静香選手がアジア初の金メダルを取られたことは皆様の記憶に新しいことと思います。私も興奮しながらオリンピック中継を見ていて、昨夏イタリアに研究留学したときのことを思い出した事もあり、そのときの様子を少しばかり御紹介させて戴けたらと思います。今回は研究内容よりも生活に関してを優先させて戴きます。

私がイタリアで研究をさせて戴けたきっかけは、現在のボスである倉橋教授がイタリア国際先端研究所（SISSA：Scuola Internazionale Superiore di Studi Avanzati）で嗅覚の研究を行っている女性生理学者であるDr. Meniniと過去に数度共同研究を行っていた経緯があり、私を彼女に紹介して下さいました。Dr. MeniniもResearch Fellowとしての受け入れを快く承諾して下さい、初海外研究を行う運びとなりました。SISSAがあるトリエステ（Trieste）はイタリア東端、スロベニアの隣に位置し、人口約23万人の中規模な都市であり、宮崎駿監督の映画「紅の豚」の舞台にもなったアドリア海を望む風光明媚な都市でもあります。夏にはドイツやフランスからもバカンスに来る人もいます（同氏監督「魔女の宅急便」に出てくる海岸沿いの街はトリエステがモデルなのではないか？とイタリア人学生とも話しあったくらい景色が似ています）。日本ではまだまだ知名度の低いSISSAではありますが、イタリアの中では有数の研究機関であることは言うまでもありません。



Dr. J. Nichollsと一緒にSISSAにて

実際に渡伊するまで、イタリアというと緑・白・赤の3色国旗、情熱的な人柄、まさにイメージは「Amore Cantare Mangiare！一愛して歌って食べて！」のお国柄だと思っていました。が、トリエステ空港に着いた時、何か違う、と感じました。こじんまりとした空港はもの静かで、街中も、人々も「底抜けに明るい」イメージとは大きく隔たりがあり、非常に落ち着いていました。歴史的にイタリア文化よりもオーストリア文化を色濃く受けていた過去があるからでしょうか。空港に迎えに来てくださっていたDr. Meniniは私を見るなり、「Ciao!!」とHugとkissをしてくれました。生まれて初めてのHugとkissに目を丸くした私は飛行機の中で覚えたばかりのイタリア語で「初めまして」と挨拶を無事に済ませ、イタリアでの長くも短い生活が始まったのです。

SISSAでの研究生活は非常に新鮮なものでした。1日のタイムコースを紹介します。毎朝、実験を始める前にDr. Meniniにその日の実験計画を説明し、1日がスタートします。私は嗅覚の電気生理実験を行う予定でしたので、毎日パッチクランプセットでどのような記録を取る予定で、ど

うやっけ解析するか、とディスカッションすることが日課でした。しかし、朝9時に研究所に行くと、誰もいません。「今日は何かの休日?」と守衛に聞いても「いや、君が早すぎるんだよ」と笑われる始末。10時過ぎになり、1人2人と研究室に人が集まりだすと、誰からともなく「café?」と誘いあい、研究所内のカフェテリアへエスプレッソを飲みに行きます。エスプレッソはイタリアの名物でもあります。トリエステ地方では「nero (ネーロ)」と呼びます。ネーロとは黒、という意味ですが、地方によっては「ネーロ」と言う赤ワインがでてくることもあるので注意が必要です。カフェテリアでは仲間達、時には著明な教授や担当教授なども一緒に朝の1杯を楽しみます。その後、昼まで実験・研究に没頭し、ランチタイムは食堂か野外のベンチでゆっくりと仲間とランチを楽しみます。彼らはよく「何故日本人はそんなに働くの? 家族との時間をつぶしてまで夜遅くや休日まで仕事するのは本当?」と聞きます。そのたびに日本人とイタリア人の違いを肌で感じたものです。彼らは「楽しみのために働く」と言い切ります。愛する家族とより良い時間を持つために働くのだそうです。人生を楽しく過ごすために休みをしっかりと活用し、空いた時間で研究をするという日本ではちょっと信じられないような研究生活をよしとするのだそうです。昼食後は実験・研究に没頭し始め、と言っても、時折隣のパッチのブースから鼻歌が聞こえたり、「Come ze? (How are you?のトリエステ風言い方)」と様子を見に来て議論が始まったりと、にぎやかです。午後3時近くになると再び「Café?」のお誘いです。そこで小1時間程、研究に関するディスカッションや国際交流・休日の過ごし方まで色々な話の花が咲きます。驚いた事に6時頃になると、「Ciao〜!」と言って殆どの人が帰ってゆくの。です。

私がイタリアで研究して一番驚いたのは「この人達はいつ仕事をするのだろうか?」ということでした。それでも研究成果が出ているのを見ると、研究への集中とリラックスとのメリハリが非常に上手な事に気づきました。この点は、私が最も不得意とするところでしたので、イタリアで得た価値観や時間の使い方はその後、非常に役に立っています。

また、SISSAでは研究以外にも大きく得るところがありました。1点目は言語です。研究所と言っても、殆どがイタリア語での会話であることや、トリエステの街では殆ど英語が通じないことから、わずか2ヶ月の滞在でも否が応でもイタリア語を実践的に話すことができるようになりました。2点目は色々な方との出会いでした。特に、著明な生理学者であるDr. John Nichollsとお会いし、滞在中に何度も彼のラボに伺ってCaféをしながら様々な話をする事が出来たことは、とても幸運だったと思います。Dr. Nichollsと言えば、生理学を行っているものは知らない人はいないほど優秀な生理学者です。学生の方々にはFrom Neuron To Brainの著者である、と言ったら誰でも思い描けるでしょうか。彼は今、研究以上に教育に力を入れているのだそうです。世界中の若い人に生理学の面白さを実験や研究活動を通して実感して欲しい、と仰っていました。帰国直前、一緒に写真を撮って戴いた際、私も日本で頑張ります!とすっかり宣言してしまったこともあり、迂闊に力を抜けない日々ですが、Dr. MeniniやDr. Nichollsを始め、イタリアでお世話になった皆さんに研究を通していつの日かお返しができたら、と思っています。最後になりましたが、イタリアでの研究費用は花王芸術・科学財団によってサポートされましたこと、関係者の皆様に感謝申し上げます。

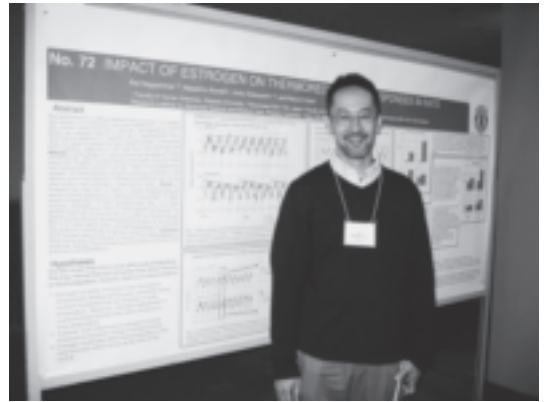
生理学者であること？

旭川医科大学，橋本真明先生から引き継ぎました。橋本先生とは体温関係の研究を通して仲良くさせていただいております。研究というよりは酒を介してといった方がよいでしょうか？ San Diegoの学会で2人でメキシコTijanaまでビールだけ(?)を飲みにつれていただいたのはいい思い出です。

私の経歴は決して自慢できるものではありませんが，こんな変なやつもいるということと，こんな生理学へのアプローチもあるのだということをしただけ後進に知ってもらいたくてこの原稿を書くことを引き受けさせていただきました。

私は京都府立医科大学の出身で，当然と言えば少し問題があるかもしれませんが，臨床指向，すなわち早くいっばしの医者になって世の中の病に苦しむ人々を助けたいと思うような医学生でした。当然，生理学が好きでしたが，あくまでも臨床医学のための基礎，できるなら早めに臨床を学んで実際の現場に飛び込みたいと思っていました。結果的には，第一生理学の森本武利先生（体液生理学）にお世話になるのですが，当時は赴任されたばかりの外山啓介先生（視覚情報生理）の講義が面白くて，他にも関連した本を読んだりしていました。ただ基本的には臨床といっても外科指向，大きく勘違いしていたとは思いますが，手先さえ動けば（頭を動かさなくても！）自分の望みはかなうものだと思っていました。背景には卒業後すぐに亡くなった父親が脳出血，原発性肝癌と苦しみ，その過程でいくつかの誤診と，不適切な治療，対応といったものに対する仕返しみたいな気持ちもあって，とりあえず臨床のフィールドにはやく出たかったのかな？とも思っています。もっとも，そんな気持ちは今は（髪の毛とともに？写真参照）うすれてしまいましたが。ただ，余裕をもって基礎医学をもっと楽しめていたならと，時々後悔しています。

私が生理学に再び興味をもち始めたのは，卒業



Physiology and Pharmacology of Thermal Regulation
2006, Arizonaにて

後の2年間，循環器外科のチームに加わったことがきっかけです。今では体外循環を使わない，心臓を冷やさない，そして短時間に終わる，そしてこの結果，入院期間も短い心臓手術が当たり前のようになってきています。しかしながら，当時心臓手術は大手術であり，外科の技術も当然ながら，その後いかに循環，呼吸，体液管理をしていくかが重要な課題でした。手術書，術後の管理マニュアルとともに生理学の教科書（とくに植物系のパート）を詳細に読み直したことをよく覚えています。

その後は…話せば長くなってしまいますが，4年間だけ生理学を学ぼうと京都府立医科大学第一生理（前述，森本武利先生）にお世話になり，そこでの刺激的な人々との出会い（自由かつ学問に厳しい）がありました。特にセミナー室で繰り返された，能勢博先生（現，信州大学教授）とのレクチャーのような，遊びのような，議論のような，会話の数々は，今でも私の生理学に対する根幹をなしています。また，その後，Yale大学John B Pierce Laboratory, Ethan Nadel先生の下で働くことができたことは，私の生理学への結びつきをより強いものにしました。ただ，それから生理学に全身devoteしてというわけではなく，オーストラリアに臨床医学をやりたに寄り道したり，いろん

なことに興味を持ちながら今日にいたっています。

実際、今でも私は本当に生理学者なのかな？と思うことがあります。確かに生理学は好きですし、やりがいのある仕事です。第一、研究費をいただいて、それで飯も食ってますし。医師免許を持っ

ていますから医者であることは間違いではないでしょう。ただ自分が本物の生理学者であると胸をはって言うには、まだまだ時間がかかるような気がしています。生理学のお免状をいただくには長い道のりが必要ですね。

愛知学院大学歯学部生理学講座

片倉 伸郎

禍福

鶴見大学歯学部生理学講座の大貫芳樹さんから推薦いただきました。

原稿依頼を受けてから慌てて『日本生理学会雑誌』を開き、「Afternoon Tea」なるページを恐る恐る開けた次第です。数号読み進めましたが、いずれもご自身の研究や教育に関する意見などが書かれてあり、臨床と基礎を行ったり来たりする中途半端な私にはいささか腰が引けてしまいました。

そこで、あまり皆さんの経験のないことならば書けるかと筆をとった次第です。

それは2001年6月4日のことです。当時私は臨床におり、70歳以上のご高齢の方の歯科治療を担当する部門で臨床に携わっておりました。午前中の治療も佳境に入り始めた11時、自分の身体に起こった異変に気がつきました。口腔内の右半分が局所麻酔をされたように痺れ始めたのです。続いて、唾液が飲み込めなくなりました。完璧な！嚥下障害です。これは悪夢だ。意識は清明、体幹四肢に運動障害は今のところ無し。うーん、右脳幹外側だな！それも、延髄！

「研究者は、自分の研究している領域の疾患に悩まされる。」よく聞く話です。この時、ふっと生理学の師匠である中村嘉男先生の顔が浮かびました。「脳幹の研究などするのではなかった！」「じゃあどこがいの？」と聞かれたら答えに窮したでしょうが。

この時点で、急ぎ回復室で休むことにしました。これ以上範囲が広がりにませんように！しかし本人の希望とは裏腹に事態はさらに悪化します。しばらくの休憩の後、起きあがろうとすると、平衡感

覚が大乱調。真っ直ぐ立てないのです。ここで、同僚に水をオーダーします。「冷たい水、買ってきて。」数分後、手渡された水に、「これ冷たくないから、別のにして。」「充分冷たいですよ。」との返事。思わず、水の入ったペットボトルを持つ左手を見つめた僕の心が冷たくなってしまいました。頭部とは反対側だ！

ここで、消極的な解決策を諦めることにしました。当時勤めていた大学には幸いにも医学部があり、その神経内科には同級生でも優秀なK君が在籍していました。積極的に行こう。医者だ！診て貰おう。状態を伝える僕の電話にK君は「君のところは高齢者歯科だよ。で、その患者さんはおいくつ？80歳を越えてる？」「いいや、40代。」「若いね、ひょっとして君？」「はい。」「急いでおいで！」

ベッドを確保してからは更に眼振まで始まる始末。この時点で、「これで、研究も臨床も諦めなくては。」と覚悟しました。

しかしその後、1ヶ月の入院と1ヶ月の自宅療養を経て、研究も臨床も諦めなくてもいい体に回復できました。僕を診て「Wallenbergだね。大丈夫、回復するよ。」とニコニコしながら対応してくれたK君の笑顔が闘病の支えになりました。

当時、僕を応援してくれた、高校生の娘と中学生の息子はそれぞれ医学の道を歩み始めました。何かしら父の闘病する背中がきっかけになったのでしょうか。そして、当の本人は、転んでもただでは起きない。未だに嚥下障害に悩まされながら、嚥下の研究をスタートさせています。人生に偶然はないのかもしれませんが。